

# 名古屋市蓬左文庫蔵『続学舎叢書』翻刻(十二)

野崎典子

今回は「名古屋市蓬左文庫蔵『続学舎叢書』翻刻(十一)」  
 『あいち国文』第十一号、平成二十九年九月、あいち国文  
 の会」に続くものである。今号には『続学舎叢書』第三冊  
 十五丁表から三十九丁表までの翻刻を試みた。「柳生鰐之  
 図」(目録は「柳生鰐之図」、「御幕之記」、「武芸極意」の  
 武」に関わるものである。なお「武芸極意」については、  
 殆ど同文のものとして中村政水(得斎)編『道学資講』巻  
 八にも所収されている。

〔翻刻〕

柳生鰐之図

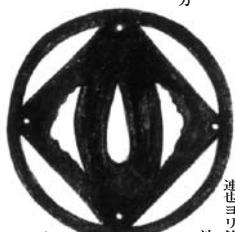
〈一五才〉



岩田氏持  
 堅二寸九分  
 横二寸三分



家二有  
 厚二分八厘  
 巾二厘スリ  
 大サ  
 二寸五分  
 ホド

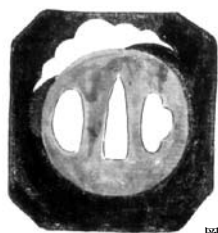


連也ヨリ鈴木與五右エ門江  
 池田薪右エ門  
 江高木全江  
 上野小左エ  
 門江  
 厚サ一分  
 七厘  
 大サ  
 二寸五分ホド



家二有  
 厚サ一分半  
 樋之外一厘  
 スリ

〈一六才〉



連也ヨリ  
岡崎  
連入江  
宇野  
朱左  
エ門江



佐藤源左エ門  
厚サ三分  
ワタリ  
二寸四分



水野藤兵衛持  
初山口田三郎  
厚二分  
大サ  
二寸三分半  
重サ  
三拾二匁  
五歩



初中島庄蔵  
今志水家ニ有



上野小左エ門



服部半四郎持  
厚サ二分余  
中ウスシ

〈一六ウ〉



藤田彦左エ門



村瀬初右エ門



水野勘蔵持  
厚サ二分余  
中厚二リン  
ホトスク  
廻リ  
二寸  
二分余



鈴木新兵衛



大津弥三右エ門  
厚サ二分ヨ

〈一七ウ〉

〈一七オ〉



裏竹之節  
下二又一ッ

連也ヨリ田邊ヲウ買  
今二有  
切羽スキ二里  
厚サ二分三厘  
大サ二寸四分ハリン  
中厚  
一分二厘



初 富三郎  
今勝野分左エ門持



馬場六右エ門



服部藤左エ門持



大津庄兵衛持

〈二八才〉



連也ヨリ藤田江  
大サ大テイ  
圖之通  
ウスシ



〈二九才〉



〈二八ウ〉



馬場三右エ門持



江戸ヨリ  
海老屋  
求来ル由



〈二九ウ〉

鈴木兵右エ門江  
大サ二寸六分四厘  
厚サ一分八リ  
中厚サ一分  
八リ  
樋ノ巾  
八リ  
重サ  
三十三匁



連也ヨリ  
指物師小左エ門二  
給リ子孫  
今二有



竹屋九右エ門持  
耳厚一分八厘  
中厚  
一分三厘  
ホド



厚一分五厘  
丸耳



〈二〇ウ〉



馬場藤三郎持



厚サ  
一分八リ

〈二〇オ〉



初メ連也ヨリ佐藤  
八郎右エ門江今  
鈴木新兵衛  
厚サ二分  
モヤウ  
スキ  
サゲ



鈴木勘右エ門



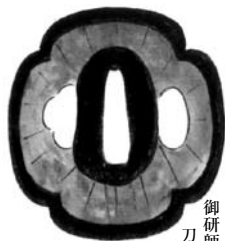
家ニ  
二枚有ヨシ



服部半四郎



連也ノ御友岡右エ門江  
十四才之時給由  
岡右エ門七十五卒  
宝曆十四年  
マデ卒後  
七十年ニ  
及ヨシ



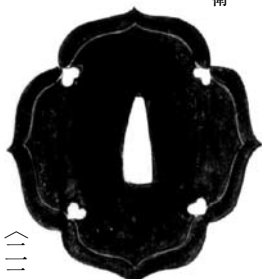
御研師治郎兵衛  
刀ニテ見ル



吉田左兵衛持



初馬場六右エ門  
藤田忠藏  
今加藤久八  
モツ



〈二二才〉



〈二二ウ〉





山吉作ノ内ニテ  
見ル



# 御幕之記

〈二四才〉

鷺水閑談に源義経一の谷首実検の時打玉ヲ御幕惣白是をしたしろと云むかしハ引両也義経の曲景にめされ長刀を持給ふハ故実有事なり幕五行陰陽を表す陰の方の物見を日天の物見といひ陽の方の物見を月天の物見と云又貪狼トラウラウシ禄存コクモン巨門ゲイモン廉貞レンテイ文曲モンキョク破軍ハクン武曲ブキョクの七星の物見有内五仏を納む中尊を大日とし陰の方に弥陀觀音陽の方へ釈迦不動あり義経幕の古法是なりと見へたり

## 目錄

〈二四ウ〉

〈二二ウ〉

〈二五才〉

- 一 引両御幕御拝領由緒
- 一 引両御幕出来
- 一 布交御幕由緒
- 一 芝摺御幕由緒
- 一 中貫十文字御幕由緒
- 一 幕故実相伝
- 一 田町連幕故実相伝
- 一 御幕新規出来
- 一 紛失御幕

〈二五ウ〉

以上

引両御幕御拝領由緒

東照宮御年譜曰慶長十九年甲寅十月三日賜引両之幕及白旗於義利曰明日之尾州而発兵

〈二三才〉

始君知曰御簾ハ頭黒の白簾に白ニ葵の丸の御紋を  
附て五本なり麾は黒の麾に白き御簾也又外ニ八幡の  
神号下に鳩一双附たる白簾也御幕ハ引両の

御幕なり但中白の  
御幕と云 尾張家秘府書曰源家中黒の

御幕ハ源頼義公奥羽前九年東征之時用ひ給ひ

後三年の合戦には第二之軍とて二ツ引両之幕を

御陣營ニ引せ給ひしより源義家ニ至りて引両筋を（二六オ）

執出し用ひ給ふ仍て後世新田家には中黒足利家ニハ

引両を伝へ用ひ給ひしと也

東照宮より義直公に命して言引両ハ八幡殿より以來

相伝にして代々將軍家の紋なり故に白簾白地八幡の神  
号下二鳩の  
地緯第二第四  
の簾からん也

及引両之御幕の簾からん也 譲らせ給ふのよし也

松平秀雲伝説曰引両の幕ハ足利家幕之紋也

此幕被進候意趣は八幡太郎義家ハヒタシロ湿白之幕

幕五幡共  
白をいふ 是を惣領家代々頼朝卿に至り是を用は

新田大炊助義国ハ二男家ニ而中黒の幕幕一幡  
黒し

を用ゆ足利判官義康ハ三男家ニ而引両之幕幕二幡  
黒し

を用ゆ足利將軍尊氏之時より足利尾張守高経（二六ウ）

代々尾張守護と成て引両之幕を用ゆ高経之孫

右兵衛督義重將軍義満之代官領職ニ成從三位ニ

叙し右兵衛督永補とす口官無之而叙爵  
するを永補といふ 世々武衛家

と云武衛ハ右兵衛督之唐名也其後織田家尾張

一国主維是より武衛家断絶

源敬公より尾張被進候節武衛家断たるを被継候  
御意ニ而右兵衛督ニ被任右ハ引両御幕被進候御代々御叙  
爵右兵衛督御永補与成是也

引両御幕出来

万治元戌三月廿一日

一 引両之御幕被 仰付出来

右取扱浅岡伝藏拜領物被

仰付候儀御納戸帳ニ見候

（二七オ）

布交御幕由緒

布交御幕黒三布  
白式布 右御幕之儀は引両之別名ニ而

已前は於御作事引両之名目を憚り候哉引両之御幕

を布交与相唱候処安永六酉年布交御幕之

名目已後相止引両幕与相唱候筈相成

芝摺御幕由緒

芝摺御幕上三布白  
下式布黒 右御幕之儀ハ天明年建中寺

御再建之節於御作事方布交之御幕を右之通

縫直芝摺与相唱用ひ候処當時右御幕無之

候付自然二名目不相唱様相成居候処文化元子四月

已来弥唱相止候段御用人衆より右奉行江被申

談候旨御幕方江も申聞有之

（二七ウ）

中抜十文字御幕由緒

尾州五ヶ所御門御番所ニ打有之処御幕中貫  
十文字之儀与ハ元来福嶋左衛門太夫正則家紋ニ而  
右幕清須城門ニ打有之

〈二八才〉

御城請取之節其儘ニ而請取不相改用ひ来右  
御番所御飾鉄炮ニは織田家之紋所附居候処右ハ  
享保年中

御家御紋附ニ御取替相成候得共幕之儀はやはり  
中貫十文字御用ひ相成来御儀ニ付向後も勿論  
十文字ニいたし候筈寛政五丑七月極

幕故実相伝

寛文五巳正月

一 殿様幕之故実

御尋被遊候間当役伝来之趣委相調申上候様  
御側同心頭衆被申談申達候趣如左  
覚  
〈二八ウ〉

外幕

一本幕 四丈貳尺  
手繩六丈三三尺

一中幕 三丈六尺  
手繩四丈八尺

一小幕 三丈  
手繩四丈五尺

右三帖之幕与相唱中幕水色ニ而夜幕与

相唱小紋幕ハ雜幕与相唱申候

一幕ハ十二ヶ月を表し布拾貳反之内六反四ツ割ニ而

白黒青三ツ繰手繩ニ仕其壹分を以乳ニ相用

五反を以幕ニ仕貳張ニ而陰陽之幕与相唱申候〈二九才〉  
但白幕ニは白之手繩ニ御座候

一 陽之幕乳数貳拾八宿を表し二拾八ニ御座候其内

斗宿を除キ候故其所ニ乳貳ツ重附候乳長サ壹尺

四分広サ壹寸貳分附目は七曜を表し七ツニ御座候

一 陰之幕ハ乳数六禽を表し三拾六ニ御座候

陽之幕縫方乳附之布上之方壹寸九分表江折返し

左右之端も壹寸以上折返し右ハ表江左ハ裏江折返し申候

一 陰之幕裏より合縫ニ仕乳附表江折返し平縫ニ仕候

日月之物見広サ八寸五分両端黒革ニ而留メ一之布は

二之布之間ニ壹尺貳寸其次之布ニ三ツ其次之布ニ

〈二九ウ〉

四ツ都合九ツ御座候月月の物見ハ

帝王之外ハ憚候義ニ御座候

一 幕上之布与二之布之間ニ五色ニ而陰陽之糸一通有之義

本式ニ御座候又ハ白糸ニ而も縫申也

一 幕紋所五ツ

帝王將軍家之御幕は五布へ掛け吉四位大家ハ二

布より四布被掛諸士ハ二布より三布被掛而附候義ニ御

座候

一幕串八角ニ而八尺上木口切籠大將からハ拾本諸士ハ

八本切籠より四寸程下ニ



將軍家は環諸士ハ折釘打之昼ハ串幕之内ニ打夜ハ外ニ打申候

〈三〇才〉

一 陰陽之幕式張を以壺双与相唱外幕内幕

式張を以も壺双与相唱申候

一 軍陣ニ近世は陽之幕而已專ニ相用ひ申候

内幕

一 内幕絹浅黄又は紺薄柿色杯相交セ候近世は

略式ニ而金欄緞子等も相用堅布長サ五尺式寸

上横布共五尺又は六尺ニも仕候

一 布数上横布共拾三両端ハ乳式ツ重附候摘縫

横布ハ伏縫裾ハ表江折返し縫ヒ黒革又は

藍革ニ而纈纈長サ三寸巾壺寸ニ仕候

一 乳数十五十六七十八之内染色布与同色ニ仕候

〈三〇ウ〉

一 手縄長壺丈五尺浅黄ニ而陰陽之糸有之乳付并

手縄之作法本幕同様ニ御座候

一 幔幕緞子横布并下纈纈無之乳付又は縫会ニ御座候

右幕故実之趣

御尋ニ付当役相伝之総括申上候

比木 伝六

巳正月

谷口安左衛門

天明二戊四月

一 田町連幕之儀

殿様御尋之由御側同心頭衆被申談候付  
申達候趣如左

〈三二才〉

覚

田町連幕与申は大法内幕同様ニ而上二横

布は無御座候幕地絹浅黄長五尺八寸程縫

はなしニ仕候又は金欄緞子にても仕候紋所ハ上より

壺尺程下ニ附申候儀ニ御座候

四月

御幕奉行

御幕新規出来

元禄十四己三月廿日

一 八講布五巾掛御紋紺色御幕朝日町紺屋

甚左衛門江申付四張出来

〈三一ウ〉

右千村弥左衛門被移之

同年七月廿六日

一 御幕本来染貫地白紗綾四張紺屋甚左衛門江申付出来

紛失御幕

正徳五未八月三日

一 昨夜御本丸江盗人入御幕蔵開キ戸前打掛はつし有之

前椽之上ニ火打捨有之土蔵内戸前之錠明ケ御幕

長持明見候躰ニ而御幕之内五張紛失内ニハ附木も有之

候付其段申達差出候書付如左

〈三二才〉

覚

一 白手縄麻御幕

壺張

一 十文字麻御幕 壹張  
一 緞子幔御幕 貳張  
一 紅紗綾御紋附 壹張  
一 麻白手繩 壹筋  
一 赤桐油 壹枚  
右之通不相見候

八月 津金庄助

〈三三二ウ〉

### 武芸極意

〈三三三オ〉

#### 武芸極意

武芸さま／＼有といへ共何の爲にするぞと見れば二つより外なし公闘と私闘と也公闘とは上の御用に立る也私闘とハ自分の用に立る也其術さま／＼なれ共其願は二つより外なし必勝也不勝とも見くるしくまけぬ也

公闘の極意は君命に随て進退をする也君より退との命なけれハ千人百人退ても我一人ハ退ず千人百人進ても我一人ハかけずとかく君の命にしたかふか大根也是ハ士卒

の極意也主將の極意は人柄よく心入よく大勇に

して血氣の勇ならず正智にして邪智ならず

我か引まはす士卒におもひこまる、が大根本也この

根本なくては万事益なし凡古来よりの敗軍

みな多く身潰也其潰る、ハ皆上下一致ならぬゆへ也

この極意を第一に心得へし

○武芸ハ公闘になつては名人なきとてもさして三四オ

害ハなし又一人名人有てもさして益なし大勢あ

れはなきよりまし也益も時により場によりては有

へし扱馬の乗方弓の引方鎗の遣方常習ふ

と違ふ也これを心かけず又名人に慢する氣あれ

ば却而おとる事あるもの也まして大將などハ采幣

か本也手をおろし戦ふは恥辱なり凡軍中の

武芸ハ弓ハ二十余筋の矢なれば五間か七間かへ引

つけている事なれハ具足さへとをればよし具足

もあたゝまつておれは常とは違て通りよし

大勢ならんて鎗をいれるに術ハいらすふりあけて

丈夫にさへあれはよし馬も柴つなきを覚へ

腰手綱を利よくさはけハ合戦勝負はなる也桃尻

にてさへなくハ角さへあてれば下手も上手も乗崩

しの用ハたる也其外の武芸是にて考へし軍は

むせうに人を殺したるとて勝ものにてなし又猥に

〈三四ウ〉

ころさるゝものでもなし古戦を見るに負軍の外

に大勢の討死ハなきもの也主命に随ひ身くつれ

をせぬか勝負の本武芸の極意と心得へし又

武芸も戦場のわけを合点するを極意と心得へし

私闘ハ不義に似たりしかれ共今の風私の鬱憤を言

上する事なし自分うちにたす事になり上より

の法も喧嘩口論猥に不可為とありて私に不可

為とはなし切かけられてはあいしらハねは

ならぬ也増而盜賊乱心などの切かけたるに負ては本意

なし是ハ私闘といへとも命を全ふして乱をしつ

むるは公闘におなし扱此等に勝の極意胴をすゑる

か根本也芸に慢せぬか其次也芸か其次也盜賊乱心

に先ツハ飛道具処てはなし刀が私闘の芸の第一也

殊に平生腰にさすものなれハぬきかた切かたを心に

〈三五才〉

懸てよし然共盜賊ハ本より利欲を主とすれハ胴の

すわりたる人になにとて勝へしや乱心酒狂ハ切て

はいな物也心みたれたる人なれはとらゆるに安し喧嘩

ハ両成敗也勝ては臆病也主の家来を殺してにける

と云もの也主の宝をぬすんてにけたるも同じ盗人

同前也尋常に腹切事古来心懸有武士みな如此

然らハとても死ぬる命也にけさへせねハ見くるし

き事ハなし見事になきまで也扱名人に成ても

若シ我より又名人にあへハ殺さるゝ也我より下

手なものには勝てもほまれならず又ふと名人

をころしたるハ天然にして理外也かくいへはとて

武芸を捨よとはあらず武芸に泥て心をよ

はくすへからす本を忘れて力をいれもせず無用

のいとまを末につゐやすなどの事也

〈三五ウ〉

今の武芸はなに故軍用と違ふぞや曰今の武芸は

花なり武中の文也軍用ハ実也武中の武也然る

に武芸にかたを設け流をわくるは大かた近世の事也

古来まづハ四五百年以前迄の武士ハ皆禁裏の直参

にて在ミ所ミに自分の田地を扣へ国守の支配を

うくる迄也扱六十六国各学校あり隙さへあれば

学問所にゆき書をよみ義を磨きて武の本を

立馬に乘弓を提て野山に遊び嶺をとひ河を涉

て鳥を射獸を逐其足をかため其芸をならふ

又年ミに教戦とて軍の仕方を教へ大将ハ下知

をしなれ士卒ハ采配に付ならひ手足をふみ堅め

進退を志つくるを武芸と云世間大に乱て後は

武芸ハ平生の所作となり稽古に不及文道は

もとより習ふにいとまなし天下一統となりては

公儀の御條目に左文右武を以天下の鑑とし給へ共(三六才)

是迄習ぬ文ハもとよりつとむる人少く是迄朝夕

の仕事にしたる武には退屈して稽古には及

はず其上一統の初自然と無事を喜ぶ故そうまし

き武芸ハ習ひかたし然る故に世治る程武士の仕事

弥少く手足もゆるみ邪惡におちいるへき世に功者な

る人此時節を考或神道により或は禪学をかり

色ミとつやを付ケ見物によき様にして武士の慰と

なし又奥ふかく椿立てはけみをつけたる物也如此なれ

〔三七才〕

とも全く実用にならぬには非ず元より実用に  
こまかき術はいらず手足達者に道具になれる  
を極意とす此武術さへと、のへハ手足かたまり道

具になれる故実用になる也然るに古人は如此  
合点をして無證に武術に泥まぬ故害なし今の  
世になりては其实を忘るゝもの多し或は実用

にも其儘にて用ひらるゝことく思ひ或はまして〔三六ウ〕  
至極に至らねばまつたく実用にたゝざる様二思ひ

これにのみ心をくたき武士の根本を修練する

事を忘るゝハ其害尤甚しおそるへしつゝしむへし

凡戦国の時は生死定まりなし生死かるけれハ私欲

あさし私欲あさければ義心自然と厚し又四五

百年以前迄ハ武士各文武をつとめおこたれは刑罰

ありはげめは褒美あり是ゆへに義にあきら

かにして恥をしる事自然と諸士の俗一家の風と

なりかたまる歟世乱れ学なくとも士俗家風にもまれ

義有て恥をしる也然るに一統の時節此風俗を先

祖学問の余慶世間戦国の故なるを不弁世治り

教なくてハ此風次第におとろふるに氣かつかず只

武芸のみを世話やき風俗と恥との稽古なき国多

し然る故に世治るに随ひ尻かあたゝまつてハ

欲の世の中となりゆき士風家風一人わるくなれは

二人になり三人になりて風俗次第にあしく成武芸

ありても武士の本なけれハ油あつて灯心なく矢あつて

弓なきか如し然ハ今の国主郡主ハ武士の根本を

引たてて肝要也武士も又其たましひをいれるか本也

此魂しいハ何を以入るへきやよく考へし忠孝の

天にもとつき義理の人にそなはり是をつとむはづせば

人に非ずといふを至極に合点しぬくへし是卒爾

に合点ゆく事に非ス勿論うまれつきハ頼みになら

すとへ一旦合点しても骨髓にとをらねば益

にたゝぬ也学てさへ久しからぬか又学ひかたあしけれハ

届キかたし学ても届かぬにまして学はずして

届くべきしや若し学すしても我は届くといはゝ

聖人に非ずハ名将なるへし米の直段を苦にし人

の富貴を浦やむ根性詩を作り文をかきて人に

ほこる学問にては届くへき事にあらすよく〔三七ウ〕

心得へき事也さふらひと武士の別は士武士并に

論す武芸の是非ハ武芸論ありと云

享保乙卯九月 張州 藤安謹書

元文五庚申五月 吉田先生請備書重躬 〔三八才〕